



Title	1950年代北欧モダニズムと民藝運動との親和性・非親和性
Author(s)	長久, 智子
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950年代北欧モダニズムと民藝運動との親和性・非親和性

長久智子／愛知県陶磁美術館

はじめに

19世紀後半、産業革命による弊害の数々がイギリスのみならずヨーロッパ各国で認識されるようになった。何より大きな問題は、急速に膨れ上がった工場労働者が都市部で形成した貧民街とその劣悪な衛生環境にあった。北欧諸国での近代工芸デザイン運動は、農業国として歩んできた彼らがどのように工業化に順応し、またそれによって生じた社会問題を解決していったかの軌跡と位置付けることができる。国家の施策とも連動している北欧の近代工芸デザイン運動は、美術史・デザイン史上の視点からのみならず、政治・経済史からも検討されるべき問題といえるだろう。

一方で、日本においては、同じくイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に触発されてハンドメイドの家庭用品への再評価と保護・復興に取り組んだ柳宗悦(1889-1961)らによる民藝運動がある。柳や濱田庄司(1894-1978)らは戦前すでにスウェーデンを訪れ、また戦後にも特にスウェーデンのデザイナー／陶芸家たちと交流を持ち、その思想にも触れていた。ここでは民藝運動の中で、実際に新しい「民藝品」制作を試みた鳥取県の医師／ディレクター吉田璋也(1898-1972)らの活動を概観し、スウェーデンでの工芸デザイン運動との共通点・非共通点を検討する。そこから、日用品の美的・質的改善による社会改革運動という近代工芸デザイン運動が各国で展開していく中で、北欧近代工芸デザイン運動が成し遂げた成果の意義を改めて位置づけることが目的である。

スウェーデンのデザイン工芸運動

北欧諸国においていち早く組織的に近代工芸デザイン運動を推進していったのはスウェーデンである。そこで大きな役割を果たしたもののひとつに、スウェーデンの社会活動家エレン・ケイ(1849-1926)による家庭生活改革活動がある。彼女はストックホルムのサロンの中心的人物で、スウェーデンの手工芸復興運動やイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動にいち早く注目し、生活用品に簡素で機能的な美しさを求め、人々の美意識を改革する活動を行いはじめた。この活動と同時期に、ストックホルムでは1845年、手工芸の保護および職人技術を工場労働者に教える学校を設立する目的でスウェーデン工芸協会(Svenska Slöjdföreningen)が設立された。その名称 Slöjd=crafts(英)の示すとおり当初は手工芸の保護・育成を目指し、先述したケイらとも連動しながら活動を広げていた。しかし、ドイツのミュンヘンでドイツ工作連盟が1907年に結成されると、思想家グレゴール・ポウルツソン(1889-1997)らをはじめ、協会に関わる人間がその思想に影響を受けていく。その結果、協会はドイツ工作連盟の中心人物であるヘルマン・ムテジウスを招いて直接的薫陶を受け、機械による工業生産を肯定し、その製品の品質向上を目指すというモダン・デザイン推進への大転換を行った。ドイツ工作連盟に則って1910年代初頭以降、画家や建築家といった若いアーティストたちを陶磁器やガラス工場へアート・ディレクターとして積極的に招致し、職工たちと協働させた試みはデザイン史上特筆すべき活動といえ

る。と同時に、このように発展していったスウェーデンの近代工芸デザイン運動は対象が家庭用品の生産に向けられていたために陶磁器やガラス、家具といった分野に特化されていった。

民藝運動と北欧モダニズムの交差

柳宗悦、濱田庄司、式場隆三郎（1898-1965）は1929（昭和4）年、ストックホルムを訪れ、スカンセン野外博物館および北方民俗博物館を見学した。このふたつの博物館は、民族学者アーサー・ハゼリウス（1822-1901）が1891年に私財を投じて蒐集・移築した地方建築物および20,000点に及ぶ膨大な民具を展示する施設で、3年前に「日本民藝館設立趣意書」を上梓した柳らには感銘を受けるところ大であった。その後1952（昭和27）年ストックホルムを再訪した彼らを歓迎したのは、スウェーデン工芸協会によってグスタフスベリ製陶所へ招致され、国内外で高い名声を得ていたデザイナー／陶芸家ヴィルヘルム・コーゲ（1889-1960）であった。コーゲは1956（昭和31）年に来日し、柳や濱田はもちろん、河井寛次郎（1890-1966）ら民藝派の作家とも交流している。翌年、柳らがスウェーデンへ贈った膨大な数の日本の「民藝品」や濱田や河井の陶芸作品は、コーゲらによってストックホルムとイエテボリで「日本のかたち」展として展示され、スウェーデンの有識者層に高い評価を得た。こうした親密な交流から、思想的には同根である両運動の共鳴がみえてくる。

鳥取における「新作民藝運動」

柳の思想に感化された吉田璋也の主導した鳥取県での「新作民藝運動」は1931（昭和6）年頃より始められたもので、民藝運動の実践として「既存民藝品の保護」「現代的民

品の創出・販売」「現代的民藝品の使用」を行った。しかしこれは手仕事と国産材料に拘るゆえにおのずから日用品から高級手工芸品へ移行せざるを得ないという矛盾を当初から孕んでいるものだった。吉田自身も危惧したその矛盾は今日、彼のディレクションによる製品が「民藝品」という名の地方特産高級工芸品へ変貌している事実如実に示されている。

おわりに

このように概観すると北欧の近代工芸デザイン運動と日本の民藝運動の比較では、一般市民向け家庭用品のディレクション、機能主義、自然素材の研究といった共通点がみえてくる。これらはよく知られているように両運動がアーツ・アンド・クラフツ運動という同じ幹から発した支流であることを示唆するものである。一方で、最大の非共通点は製品が機械製作主体であるか、手仕事主体であるかという点にある。そもそも長い美術工芸制作の伝統という土壌を持つ日本には手工芸に対する消し難い誇りがある。社会的地位の高い「作家」というクラスがあり、腕利きの「職人」は無名に徹することができない以上、新作民藝運動にみるように、廉価な手工芸品制作は不可能であった。一方大国スウェーデンであっても素朴で簡素な手工芸品しか持たない彼らにとっては、むしろ装飾を排するモダン・デザインの思想を実践することはイギリスやドイツ、また日本といった国々よりはるかに容易いことだったといえる。弱みを生かし、素朴な農民の手工芸のエッセンス——すなわち天然素材の多用とクラフトマン・シップを工業生産に持ち込み、廉価でかつ独自のセンスを持つ日用品生産をおよそ100年で成し遂げた北欧の近代工芸デザイン運動は、そうした点で日本の民藝運動よりも一層その根源的な理想に近づきえているといえるだろう。